

アチック・ミュージアム・コレクションと水産史研究

Attic Museum's Collection and its Fisheries History Research

日高 真吾

HIDAKA Shingo

加藤 幸治

KATO Koji

要 旨

戦前のアチック・ミュージアムの活動について知ることができる資料は、現在複数の所蔵先に分散して保存・活用されている。水産史料や筆写資料は、国文学研究資料館・中央水産研究所・神奈川大学日本常民文化研究所等、民具は国立民族学博物館や国文学研究資料館、祭魚洞文庫の蔵書のほとんどは流通経済大学図書館、渋沢敬三の仕事全般にわたる資料は渋沢史料館、そして戦後の常民文化研究所に引き継がれた諸資料は神奈川大学日本常民文化研究所が管理し、それぞれの機関において整理作業や目録作成、調査研究、展示普及等が行われてきた。しかし、各資料間の関係の調査や、相互補完的な理解は、あまり進んでいないと言わざるを得ない。

今回の共同研究「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」では、戦前のアチック・ミュージアムが収集した民具の標本資料と、神奈川大学日本常民文化研究所所蔵の水産史研究関連資料との関係を見出すための、アチック・ミュージアム・コレクションの熟覧調査を実施した。この調査では、水産史研究室の調査と漁具を中心とする民具収集とは、一部の標本資料を除いては深い関連性を見出すことができなかった。とくに筌研究資料においては、方言調査と収集民具のあいだに直接的な関連性を見出すことができず、神奈川大学日本常民文化研究所所蔵の筌の民具台帳とも結びつきは見られない。このことは、地方文書を中心とした社会経済史的な研究と、聞き書きや踏査によるフィールドワークとを総合するという、水産史研究の独特な方法論を考える上で重要な手がかりである。

本稿では、国立民族学博物館におけるアチック・ミュージアム・コレクションの整理と活用、調査研究の来歴についてもまとめている。その蓄積は、諸機関の資料のつながりに関する研究をさらにすすめるための基盤となるものとなる。

【キーワード】 アチック・ミュージアム・コレクション、水産史研究、民具研究、コレクション形成、筌研究

1. 共同研究における共同熟覧調査について

民俗学は“野の学問”と称される。地方の知識層をとり込みながら、民俗学はアカデミズムとは異なるかたちで発生してきたからである。大正から昭和初期の日本では、それをオーガナイズする何人かの突出した識者があらわれた。よく知られる人物に柳田國男が挙げられるが、渋沢栄一の孫である渋沢敬三（1896～1963年）も民俗学の黎明期に活躍したひとりである。

渋沢は、邸宅内に設置した研究所、アチック・ミュージアムを主宰し、ミクロなフィールドワークにもとづく民俗誌や、地方文書の翻刻を内容とした書籍を多数刊行した。その研究の柱である漁業史研究は、若手研究者を集めて営んだ水産史研究室のメンバーらによって展開されたが、戦争の激化によって未完に終わったプロジェクトも少なくない。アチック・ミュージアムの同人による研究は、農民中心あるいは政治中心の当時の歴史観に対し、海からの視点、物流や経済からの視点、技術や道具からの視点によって、庶民の暮らしを明らかにしようとしたところに特徴がある。

その痕跡をたどる資料には、昭和初期の調査ノートや写真、映像、収集された民具、資料台帳、手紙やメモなど多岐にわたり、複数の所蔵先に分散して保存・活用されているのが現状である。水産史料や筆写資料は、国文学研究資料館・中央水産研究所・神奈川大学日本常民文化研究所等、筥や漁具等の民具は国立民族学博物館・国文学研究資料館、祭魚洞文庫の蔵書のほとんどが流通経済大学図書館、渋沢敬三の仕事全般にわたる資料は渋沢史料館、そして戦後の常民文化研究所に引き継がれた諸資料は神奈川大学日本常民文化研究所に保管されている。

共同研究「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」では、これら諸機関に分散して管理されているアチック・ミュージアムの活動を知り得る資料に対し、複数の機関所蔵の資料の関係性を見出すことに注力してきた。また、アチック・ミュージアムの同人らの資料がコレクションとして保管されている大学や諸機関の資料と、アチック・ミュージアム関連資料との関係についても、各メンバーが意識的に調査することも共有してきた。こうした調査の一環で行ったのが、戦前のアチック・ミュージアムが収集した民具の標本資料と、神奈川大学日本常民文化研究所所蔵の水産史研究関連資料との関係を見出すための、アチック・ミュージアム・コレクションの熟覧調査であった。

この調査は、直接的には国立民族学博物館所蔵のアチック・ミュージアム・コレクションの民具に、神奈川大学日本常民文化研究所所蔵の筥関連の複数の台帳のID番号等の関連する情報を見出せるかどうか、また水産史研究の一環でどのような民具が収集されたかを把握することであった。それを糸口に、戦前のアチック・ミュージアムにおける第二部会（民具研究会）および民族学博物館の整備という事業と、漁業史研究室（のちの水産史研究室）や内浦史料編纂室における水産史研究の関係性を理解する試みでもあった。共同研究における共同熟覧調査は、国立民族学博物館において、平成27年12月12～13日、平成29年1月21～22日、平成30年1月20～21日の三回実施した。

最初の調査（平成27年12月12～13日）には、加藤幸治・安室知・日高真吾・宮瀧交二・増崎勝敏・佐藤智敬・葉山茂・揖善継・星洋和の各メンバーに加え、岡田祐子氏（国立民族学博物館保谷資料プロジェクト室）にも参加してもらい「保谷資料プロジェクト室」に保管されている国立民族学博物館へのアチック・ミュージアム・コレクションの受入れ時の諸資料の調査に便宜を図っていただいた。この調査では、同館所蔵のアチック・ミュージアム収集の民具のうち、事前に申請した筥およそ100点を出していただき、標本資料に付随する情報と管理ファイル上のデータの調査を

行った。調査の主眼は、国文学研究資料館所蔵の筥調査関連資料との関係を探ることであった。民具を一点ずつ精査し、また県別に抽出したり、旧文部省史料館から引き継がれたデータとの照合を試みたりと、全員で協力して調査を行った(写真1)。

この調査で見えてきたのは、国文学研究資料館の資料と国立民族学博物館の標本資料とは、ダイレクトに結びつくものではないことであった。水産史研究室の通信調査は、民具収集とは基本的に別の流れで進んでいたと推測できる。その国文学研究資料館の資料では、方言と形態の分布調査の成果がある程度見えていたことがうかがわれる。この調査では、ひとつひとつの筥の寄贈者・収集者のデータを得ることができたので、アチック・ミュージアムの民具収集において筥のコレクション形成にどの程度意図があったかを考える手がかりとなった。また、国立民族学博物館で長年アチック・ミュージアムの研究をされてきた故近藤雅樹氏の蓄積してきた資料を、同館の「保谷資料プロジェクト室」にて閲覧し本共同研究に関するデータの提供を得ることができた。

二回目の調査(平成29年1月21~22日)には、加藤幸治・安室知・日高真吾・葉山茂・増崎勝敏・磯本宏紀・佐藤智敬・星洋和・今井雅之・宮瀧交二が参加し、水産史研究に従事していた同人の名前を収集者欄で検索してヒットした民具を、群として調査する方法で熟覧調査を進めた。調査した民具は以下の通りである。この調査では、山口和雄・櫻田勝徳・進藤松司・佐藤三次郎・喜多村俊夫・渋沢敬三と宮本馨太郎らの収集民具を集中的に調査した(写真2)。調査では、年譜や著述ではわからない研究過程を復元することができる可能性があることがわかり、各メンバーの今後の調査でこれについて注意していくことを共有した。

三回目の調査(平成30年1月20~21日)には、加藤幸治・増崎勝敏・日高真吾・佐藤智敬・磯本宏紀・星洋和・今井雅之・葉山茂・宮瀧交二の各メンバーに加え、国際常民文化研究機構の共同研究「民具の機能分析に関する基礎的研究」の研究代表者である神野善治氏(武蔵野美術大学)にオブザーバーとして参加していただき、研究交流の場とした。この調査では、宮本常一、伊豆川浅吉、吉岡高吉らの収集民具、渋沢敬三名義で収集された播州針のサンプル資料、「脇本村」の検索でヒットした吉田三郎の収集民具を集中的に調査した。また日本青年館からの寄贈資料も調査を行い、アチック・ミュージアムと日本青年館の郷土資料陳列室との関係について検討する材料とした。

アチック・ミュージアム・コレクションには、釣り漁研究に関連した対馬の厳原町における網羅的な釣針収集や製作工程サンプルの収集(渋沢敬三収集)、富山湾の台網に使用する藁網のサンプル(山口和雄収集)、琵琶湖の堅筥、タツベ(喜多村俊夫収集)など、地域の漁具を意識的に収集した例がいくつか見られる。しかし、漁業に関する資料の多くは断片的であり、水産史研究のための主要



写真1 アチック・ミュージアム・コレクションの筥の調査(国立民族学博物館)



写真2 国立民族学博物館での資料熟覧調査

な資料はあくまで地方文書であったと思われる。

2で日高真吾が述べているように、国立民族学博物館ではこれまでアチック・ミュージアム・コレクションの全容を明らかにするための調査・研究活動や、データベース作成などが進められてきており、研究目的での利用環境はより整備されてきた。今後は、諸機関に分散している資料と民具の標本資料との関係をより明らかにし、アチック・ミュージアムの研究の全容解明を目指したい。

(加藤幸治)

2. 国立民族学博物館におけるアチック・ミュージアム・コレクション研究の概要について

渋沢敬三の大きな学術成果のひとつにアチック・ミュージアムによる民具蒐集がある。現在、これらのコレクションの大部分は、アチック・ミュージアム・コレクションとして国立民族学博物館(以下、民博)の基幹コレクションとなっており、当共同研究でも水産史研究に関連した調査がおこなわれた。

このアチック・ミュージアム・コレクションは、旧日本民族学会附属民族学博物館所蔵資料として民博に移管されるまでの間におこなわれた管理替えの作業のなかで漏れ落ちた情報も多く、それらの情報を再構築するため、故近藤雅樹教授(以下、近藤教授)を中心とした研究グループによる研究活動がおこなわれてきた。ここでは、これまで民博でおこなわれてきたアチック・ミュージアム・コレクションの研究活動を振りかえりたい。

民博にアチック・ミュージアム・コレクションが移管されてきた状況は、当時、本コレクションの受け入れ担当事務の責任者であった宇野文男氏が詳細に述懐している[宇野 2001年]。そこには、1975(昭和50)年12月に文部省史料館から民博に受け入れる際、収蔵庫が建設中だったので、一時的に万博の保税倉庫に仮置きされたこと、その2年後にようやく民博の収蔵庫に移送できたこと、加えて、同年の11月には民博の開館に伴って、多くのアチック・ミュージアム・コレクションが展示されたことが記されている。このことから、相当程度、急がざるを得なかった受け入れであり、台帳と資料との突合せ作業といった確認作業も十分におこなえなかったことがうかがえる。結果として、このような受け入れが、その後のアチック・ミュージアム・コレクションの整理作業を混乱させ、その全貌を明らかにするための調査研究が必要となることにつながっていったといえよう。

アチック・ミュージアム・コレクションが本格的に研究の対象として民博で位置づけられたのは、受け入れから24年後、近藤教授が共同研究「アチック・ミュージアム・コレクションの研究」(1999-2000)を主宰したことから始まる。このときには、まずはアチック・ミュージアム・コレクションの全貌を明らかにするとともに、アチック・ミュージアムの活動自体にも着目した研究活動がおこなわれた。その成果は、特別展「大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム」(2001年3月15日から6月5日)としてまとめられた[近藤雅樹編 2001年]。一方で、民博移管時において、相当量の未登録資料が存在していることも明らかとなった。

そこで、共同研究「アチック・ミュージアム・コレクションの研究」に続いておこなわれたのが共同研究「アチック・ミュージアム・コレクションの形成過程に関する研究」(2001-2003)である。本研究では、数々の所蔵先変更により資料と収集記録の一部が散逸し、その全体像が不明となったアチック・ミュージアム・コレクションについて、現存資料の個々に関するデータの整備拡充を実現することを目的としていた。また、所在不明資料を含めて収集に関与した人物や団体を追跡調査して、収集記録の復元につとめ、同コレクションの形成過程を明らかにすることとしてい

た。そして、数多くの未登録の資料の発見やデータの修正などが図られたという成果が出されている。また、これらの成果の公開を実現するための研究プロジェクトとして、2007（平成19年）年度文化資源プロジェクトで、『アチック・ミュージアム・コレクション』の全容公開促進プロジェクト」がおこなわれた。本プロジェクトでは、4,000点を超える民族資料と、1,000点余りと推定される考古資料（古瓦・縄文土器・石棒等）といった未登録のアチック・ミュージアム・コレクションを整理し、早急に追加登録を完了させることを目的としたものであった。次に、アチック・ミュージアム・コレクションの全容を可能な限り復元し、目録化してデータベースの公開が目指された。これらの研究の成果は、特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」（2013年9月19日から12月3日）として展示公開されたが、最大の目標であったデータベースの公開には、近藤教授が2013年に急逝されたことでまだ実現できていない。

現在、アチック・ミュージアム・コレクションのデータベースの公開については、民博の飯田卓教授を代表者とするフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開」において、準備が進められている。本プロジェクトでは、収集者や寄贈者の氏名、収集のきっかけとなった調査団の名称などを手がかりに資料検索ができるよう、データを整備することとしている。また、個人名や調査団名についての事典的な説明を提供することで、歴史的な学術資料としての価値を高めることを目的としている。

国立民族学博物館にアチック・ミュージアム・コレクションが移管されて38年。近藤教授が共同研究「アチック・ミュージアム・コレクションの研究」の冒頭の挨拶で「本コレクションの全貌をつかむのは容易なことではない。もしかすると数十年にわたる研究活動になるかもしれない。」という言葉は今、あらためて実感をもって思い出す。

（日高真吾）

参考文献

- 飯田卓・朝倉敏夫編 2017 『国立民族学博物館調査報告 No. 139 財団法人日本民族学協会 附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』国立民族学博物館
- 宇野文男 2001 「国立民族学博物館と渋沢敬三」近藤雅樹編『大正昭和くらしの博物誌－民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』河出書房 p. 144-145
- 加藤幸治 2013 「アチック・ミュージアム「水産史料」の意義について」『武蔵保谷村だより』第10号 下保谷の自然と文化を記録する会
- 国立民族学博物館編 2013 『屋根裏部屋の博物館：渋沢敬三没後50年』淡交社
- 近藤雅樹 2009 「実業家・子爵澁澤敬三と、その私塾「アチック・ミュージアム」」日本不動産研究所50年史編纂委員会編『日本不動産研究所50年史』日本不動産研究所 p. 225-243
- 近藤雅樹編 2001 『大正昭和くらしの博物誌－民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』河出書房
- 西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会 2010 『渋沢敬三・高橋文太郎と民族学博物館：保谷にあった日本初の野外展示物をもつ民族学博物館』同会